慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	アダム・スミスと其後の仏蘭西経済学説
Sub Title	
Author	増井, 幸雄
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1923
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.17, No.7 (1923. 7) ,p.1148(174)- 1188(214)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	アダム・スミス生誕二百年記念号 雑報
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19230701-0174

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

アダム・スミスと其後の佛蘭西經濟學說

增井幸雄

一

Adam Smith の著書は、爾後數十年の間に亘つて、佛蘭西に於て可成に多く行はれた。

千七百五十九年を以て公にせられた Theory of Moral Sentiments は、早くも五年後の千七百六十四年に、Métaphysique de l'âme. の書名の下に佛譯せられて居る。Grimm は、此の書を以て巴里に於ては不成功であつたと云つたが、其の然らざりしことは、本書が、千七百七十四年には l'abbé Blavet によつて、更に千七百九十八年には Marquise de Condorcet によつて、同じく佛語に飜譯せられ、特に後者の手に成りし佛譯本は千八百三十年に第二版が公にせらるゝに至つた、といふことによつて立證せられた。

（Coquelin, Dictionnaire de l'Économie politique, Tome II, p. 627. 參照）

更に、千七百七十六年を以て公にせられた Wealth of Nations. に至つては、之よりも更に多く佛蘭西に於て歡迎せられたのであつて、それは幾多の譯本を生んだ。其の第一は l'abbé Blavet の手に成つたもので、千七百七十九年から八十年に掛けて Journal de l'Agriculture, des Arts et du Commerce. 誌上に始めて其の譯文が現はれ、飜譯振りの拙劣なるものありしにも拘らず千七百八十年（或は八十一年か）には Yverdun に於て書物として刊行せられ、千七百八十八年には譯者の知らぬ間に巴里で新版として現はれ、千八百年には譯者自らの手で重版せられた。第二の佛譯本は、千七百九十年に上梓せられた所の Roucher の名を以てせられたものであるが、それは、實は右 Blavet の譯文の單なる變裝に過ぎなかつたけれども千八百三年に再版まで出た。第三の譯本は、千七百九十六年に自著 Abrégé élémentaire des principes d'Économie Politique. に於て「國富論」の論旨の大綱を述べて居る所の Germain Garnier が、長い序文と註とを附して千八百二年に巴里で公にしたものであつて、それは、序文を改め註を增加して千八百二十二年に再版せられ、千八百四十三年には Blanqui の訂正を受け且つ內外諸

學者の評註を加へたる Guillaumin 版として現はれた' (Edgard Allix, L'Œuvre économique de Germain Garnier, etc., dans "Revue d'Histoire des Doctrines Économiques et Sociales," 1912. p. 317. 參照)

Smith の著書が佛蘭西に於て斯くの如く歡迎せられたのには、種々の理由がある。第一に、當時佛蘭西では、識者の意見は經濟上の自由主義に捉はれて居つたのみならず、Turgot の失脚その他によつて Physiocrates の信用が全く失はれつゝあつたのであつて、時機が誠に當を得て居つた。特に、'名士會'(Assemblée des Notables)が千七百八十七年に討議研究した所の經濟上財政上の大問題が再び此の書に時事的興味を與へたことは明白である。第二に、此の書は Physiocrates と同じ自由思想を辯護しつゝも、彼等の欠點と正反對な性質を有つて居た。即ち、結構の完璧を缺きしにも拘らず、何等神秘的な方式も難解な計算も含まずして平易流暢であり、且つ何等の獨斷を含んで居ない。それは自由主義の學説を最も滋能に説明したものであり、勞働の職分、其の勞働力の增加の手段、勞働自由の結果として生ずる人間社會の進歩等に就て述べ、Gournay や Turgot の始めた解放の運動の繼續たるものである。此の點が一部讀者の歡迎する所となつたことも疑はれぬ。第三に、Physiocrates によつて、何等の富をも生まざる不妊的 (stérile) な階級だと云ふ屈辱的な呼稱を與へられて憤懣を禁じ得ざりし商工業者は、此の説に反對する學説を Smith に發見して雀躍して喜んだ。又、Condillac, d'Allembert, Diderot, Helvétius 等の教義に養はれて Physiocrates とは時代を異にする哲學者は、Smith を目して、經濟學を取扱ふに際して抽象に換ふるに觀察を以てし、ドグマの權威に換ふるに哲學的精神を以てし、自然法の抽象論に換ふるに功利の哲學を以てしたるものであると做し、其の所説を目して、近代的に解したる自由であり、人類の進歩及び完成であり、工藝及び富の禮讃であると做し、特に「土地と地主との經濟」に反對する「勞働と工業者との經濟」であると做して、Mercantilistes と Physiocrates とを攻擊する所の Smith の自由學説をば、感激の情に打たれつゝ採用したのである (Allix, loc. cit., pp. 319-20.) 佛蘭西に於ける Smith の著作の盛行は、如上の諸理由によつて了解することが出來やう。

斯く佛蘭西の上下に喜び迎へられた所の Smith の學説が、佛蘭西の經濟學説に對して甚大なる影響を與へたるべきことは推察するに難しとしない。實に Smith

の學説は、Physiocratesの殘黨によつてすらも採用せられたのである。Physiocratesは、千七百八十年頃には既に殆んど何等の勢力をも有せざるに至つたが、其の殘黨に至つては當時猶ほ未だ其の餘喘を保つて居たのであつて、一般的の信望は失はれたが讀書家の間には猶ほ味方を有して居た。然しSmithの意見は、是等の殘黨の敢て採用する所となつたのである。千七百九十四年から九十八年に掛けて公にせられたEncyclopédie PanckouckeのDictionnaire d'Économie Politique.が、未だPhysiocratesの色彩を有して居つて一方では其の教義を嚴格な形で踏襲説明しては居りながらも、他方に於ては、例へば其の中の公債・産業・工業・價格又は價値・勞働等の諸項は全然「國富論」所載の文句の無斷の轉載に外ならなかつた、といふが如きは其の一例として掲げることが出來る。彼等は、自己の地位を維持し自己の思想の一部を安全ならしむる唯一の戰略として、自己の所説の中で特にPhysiocratesの色彩の濃厚顯著なるものを知らず識らずの間に和らげてSmithの説に接近することにより、又は、Smithが彼等の意見を採用した點を擧示することによつて、Smithの盛名を利用したのである。(Allix, loc. cit., p. 321.)

既にPhysiocratesにして然りとすれば、Physiocratesに反對する人々の間に於ては、Smithの學説が其の思想界を風靡したることは疑ふの餘地がない。洵に吾人は、Smith以後の佛蘭西に於ける經濟學上の文献を一瞥するとき、Smithの祖述者・完成者をJ. B. Sayに見出し、Smithの所説の影響を受け又は之を繼承したる者をGermain Garnier, Frédéric Bastiat, Charles Dunoyerに見出し、de Sismondiに於てすらも其の影響の痕跡を見出すのである。Smithの學説は、爾後の佛蘭西經濟學説に影響を與へたと云ふよりも、寧ろ之を支配したと云ひ得られる。Smithの正統を繼いだ學問の流れは、其の一分流を英國の學界に見出し、他の一分流を佛蘭西の學界に見出した、とも云ひ得られる。佛蘭西で説かれたる、一見Smithの説と頗る懸け離れた新奇の説の如くに見える事柄でも、仔細に兩者を比較して見ると、其の間に少なくとも一脈の聯絡あるを發見することが少なくない。況んや其の他の點に於ては、大體に於て其の祖述であり、普及であり、明瞭化であると見ても大過なしと思はれる。Smithが Physiocratesの手を經て佛蘭西の學界から借り得た所のものは、英國並びに獨逸の思想を利子として附け加へて、元利ともに耳を揃へて佛蘭西に向つて立

派に完濟せられたと云へるであらう。

然しながら、又一面から見れば、Smith の說は、佛蘭西に渡つてから其の傾向や特質の一部が益々色彩を發揮するに至つた點のあることが發見せられる。Smith は、當時まで行はれ來れる種々の學說を綜合包括して居るが爲めに、其の中には種々の特質傾向を存し、從つて之を一言に盡すとは出來ないが、然し少なくとも其の中には、物質的見解に交ふるに心理的・人的な見解を以てして居る點と、其の所說の根底には自然法的な樂觀的な見解が横はつて居る點とのあるとは、否定することが出來ない。而も此の二つの點こそは、爾後の佛蘭西經濟學者によつて繼承せられ發展せしめられて居る所の顯著なる特質たることが發見せられるのである。

筆者は、最初本篇の腹案を立つるに當つて、右の二點よりして Smith の學說と爾後の佛蘭西經濟學者の所說との比較論を試みむとするの計畫を立てたが、所定の期日の將に盡きむとするに及んでも未だ意の如くに之を纒めることが出來なかつた。依て、今は其の中の前半部、即ち Smith の學說が佛蘭西に渡つてから益々人的・心理的な傾向が發揮せらるゝに至つた點のみを示さむが爲めに、二三の論點に就て Smith の所說と佛蘭西の代表的なる古典派經濟學者のそれとの比較論を試みやうと思ふ。

二

Smith に存したる人的・心理的な傾向が佛蘭西に於て益々其の色彩を發揮するに至つた一つの點は、「富」の概念が擴張せられて、無形の富をも認めるに至つたといふことに於て發見せられる。

Smith は、Maurice Block (Les Progrès de la Science Économique, Tome I, p. 94.) の云ふが如く、其の名著に冠せしむるに「諸國の富」なる名辭を以てして居るにも拘らず、此の「富」なる名辭に對しては何等定義の形を以て其の意義を明示して居らない。けれども、彼の解する所によれば、「國の富は金銀より成るにあらずして (Wealth of Nations, Cannan's Edition, vol. I, p. 237.)」眞の富は社會に於ける土地及び勞働の年々の生產物であり (Ibid., p. 4, 240, 320, 417, etc.)」而して此の富は人間の生活上に於ける必要品・便利品及び娛樂品より成るとして居る (Ibid., p. 32.)」故に、單に之だけに就いて見れば、人間の欲望充足の資料となり得るものは總て之を富となすものなるかの如く

に思はれるけれども、Smith は、勞働が定著體現せられ而して勞働終つて後に少なくとも或る時間だけ存續する所の販賣可能なる貨物でなければ富と考へずして(Ibid., p. 313. 參照)、欲望充足の資料たるものゝ中から有形的のもののみを取て富となし、無形のものは之を富と認めて居らない。此の事は、Smithが、生産的勞働と不生産的勞働との區別を認めて、「國富論」第二篇第三章の始めに於て『勞働には、之の加へらるゝ物件の價値を增加せしむるが如き種類のものと、何等斯くの如き結果を來さゞるものとあり。前者は價値を生産するが故に生産的勞働と呼び得べく、後者は不生産的勞働と呼び得べし。例へば、工業者の勞働は一般に其の作業を加ふる物質の價値に加ふるに、自己の生活支持に充つべき價値と親方の利潤となるべき價値とを以てす。之に反して、僕婢の勞働は何物の價値にも增加を來さしむることなし。』(Ibid., p. 313.) と云つて居ることによつても窺ひ得られる。Smith に於ては、富とは物質的なものに外ならないのである。唯、之を、Physiocrates の認めて富となす所のものと比較すれば、「Physiocrates が、富なる概念をば、土地によつて增加せしめられ然る後に人間の勞働によつて消費の爲めに變形せられ準備せられ處分せらるゝ生産物のみに適用するが如くなるに反し、Smith の定義に於ては、富とは、欲望を滿足せしめ又は人間に便利と享樂とを與ふるに適する一切の物であり」(Garnier, Richesse des Nations, Édition Guillaumin, Préface, p. XLVI.) 人間の欲望の見地から出發して居つて、幾分か人的な心理的な或る物を有して居るの點あるのみ。

然るに佛蘭西の學者によつては、富の概念は、單に有形的な物質的生産物のみに限られずして、無形の生産物をも其の中に包含するに至らしめられた。而もそは、「國富論」の一佛譯者たる Germain Garnier によつて第一歩が踐み出されたのである。

Garnier は、一方では自己の飜譯に係る「國富論」の卷頭に添えた序文中に於て、Smith の説と Physiocrates の所説との比較論を試みて、兩者の立場の相違を指摘し、後者の爲めに幾分か辯ずる所あると同時に、前者の見地所説が人生日常の生活に一層よく合致することを述べて居るが (Richesse des Nations, Edition Guillaumin, Préface, p. XLV.)、他方に於ては、Smith が生産的勞働と不生産的勞働とを區別して居る點に關して、其の區別の當を得て居らないことを、自己の附したる註に於て指摘して居る。即ち Garnier は云ふ。『第一に、此の「生産的勞働と不生産的勞働との區別は、事實存在せ

ざるものであつて虚偽のものである。Smithの採る所の意味に於ては、如何なる勞働も生産的である。所謂生産的勞働でも不生産的勞働でも、之に對して支拂を爲す人に對して、何等かの享樂・便利又は效用を生産する……。衣服を洗濯する下婢も、洗濯を營業とする洗濯營業者も、全く同じ種類の役に立つ。……兩者共に生産的である。然らずんば、兩者共に不生産的である。……第二に、商工業上の視察員又は重役の勞働を生産的なりとなし、而して、公道・運河・橋梁等の維持又は公安の維持に盡す所の、云はゞ社會といふ大會社・大工場の視察員と見做し得べき是等官吏の勞働を不生産的なりとして、區別を立てるとは一層困難である。第三に、人の喉又は嗅覺を喜ばしめむが爲めに働く所の菓子製造業者や香水製造業者を生産的と呼んで、人の耳を魅する爲めに働く所の音樂家や一層高尚な情緒を生ぜしむる爲めに働く所の俳優を不生産的と呼ぶの理由があるか。第四に、各種樂器製造人・樂譜商人・道具方・裝飾畫家等を生産的勞働者の階級に入れて、是等の者の行爲を準備とする他の職業をば不生産的勞働の階級に入れるのは明かなる矛盾ではないか。兩者共に、同じ種類の消費を其の、勞働の終局の目的として居る。若し後者の有する目的が、社會の勞働の生産物中に算へらるゝに値せずとせば、何故に此の後者に對するの手段たるに外ならざる前者の勞働のみを生産的なりとするか。』

『斯くの如く考へ來れば、Smithの提唱する區別を、確實にして合理的な性質の上に樹立せしめることは困難なるが如く思はれる。若し強いて、Smithの想像する兩階級の生産物間に認め得らるゝが如き相違を求めるとすれば、其の唯一の相違は、Smithの所謂不生産的な階級の生産物に於ては何等の仲介者あり得ず、報酬の支拂を受くる者と消費者との間の關係は必然的に直接であり、そは直接に消費者の所得によつて支拂はるゝに反し、所謂生産的階級者の生産物に於ては、物に勞働を加へる者と之を消費する者との間に何等かの仲介人物が介在し、そは最も多くの場合に於て資本によつて支拂はれる、といふ點に存する。而も此の資本とても、常に結局は消費者の所得によつて代位せられるものである。……假りに或る程度まで此の區別を認めるとしても、何れが國富の增進に最も多く貢獻するやを決することは困難である。流行品商の勞働は所謂不生産的職業よりも一層多く國の富强を增すと云ひ得るか。兩階級の比較を進めて行くときは、勝ち味は最も多く

の場合に於て所謂不生產的勞働の側に在る。同一の費用を以てする場合には、此の階級の者は比較し難き程に多大の生產物を與へる。有名なる辯舌家や俳優や音樂家は短時間の間に一時に數千の消費者に貴重なる享樂を與へる、而も爲めに消費する所は稀に繰り返さるゝ僅少なる裝飾・樂器の類のみ。之に反して、富者の肉感を滿足せしむるが爲めには、釀造業者・菓子製造業者の如き生產的職業者は日々多量の貨物を消費する。極度に不生產的なるもの、全く無用のものと見做されたる僕婢の勞働の場合に於ても、見方によれば他の生產的階級者よりも一層多く產業の支持奬勵の爲めに貢獻する。Smithは國富の增進に協力するの源泉として勞働の完成と資本の集積とを擧げて居るが、所得を化して資本となすことは如何なる階級と雖も僕婢の階級に優るものはない。僕婢が衣食の資料に就て消費する所は、自ら之を供給する勞働者の場合よりも大であるが、彼等が主人に費やさしむる總支出に於ては少額を以て足り、而も其は殆んど常に注意深く節約せられる、斯くして彼等の手に集積せらるゝ資本は驚くべき高に達し、小工業者が地方普通の率より高き利子を以て借入を行ふの資源を成して居る』。（Richesse des Nations, 1802, Tome V, Note xx, pp. 171-183.）

Garnierは、Smithの意味する所では、享樂を與へ效用を與へるものが富である、而して、若し此の意味に於ての富を生產するものが生產的だと云ふならば、所謂不生產的勞働と雖も等しく生產的である、となして、富をば其の本質、作用の方面から見て、無形の富も等しく富であるとの意味を暗示して居るのである。Physiocratesの同國人であり且つ其の殘黨と同時代であつた所のGarnierは、Smithの優れるを認めつゝも猶ほ且つPhysiocratesを辯護し、兩者の間に必ずしも矛盾なきを示さむとして偶々富の意義を擴張し、無形の富の存在を暗示するに至つたのである。彼を呼んでPhysiocratesの末流（ponophysiocrate）となす者ある所以は玆に在る。

此のGarnierの考は、J. B. Sayによつて繼承せられ、而も「無形生產物」（Produit immatériel）なる成語を提げて公然明白に主張せられるに至つた。思ふに、Sayは、富の本質は價値であつて富の大小は價値の大小に從ふものであると考へた、而して此の價値を生ずる限りは一切のものが生產的であると考へた。そこでSayは次の如くに云ふ。「醫師あり。患者を見舞ひ、病狀を診察し、處方を與へて去る。而して、患者又

は家族の、他に向つて讓渡し得べき何物をも遺すことなく、又、後日の消費の爲めに保存し得る何物をも遺すことなし。此の醫師の産業は不生産的なりしや。何人も之を肯定すること能はざらむ。患者は救はれたればなり。此の生産は交換の目的物となること能はざりしや。決して然らず。醫師の戒告は謝禮と交換せられたればなり。されど、此の醫戒に對する欲望は、其の與へられたる瞬間に消滅したるものなり。其の生産は之を語るに在りき。其の消費は之を、聞くに在りき。そは生産せらるゝと同時に消費せられたるなり。予は之を無形の生産物と呼ぶ。音樂家及び俳優の産業も、之と同じ種類の生産物を生せしむ』と（Traité d'Économie Politique, VI. Édition, Guillaumin, p. 123.）。

斯くて Say は、Smith が富の名を與ふるを拒絶せしものをも富の中に包含せしむべきものなることを、種々の點よりして主張して居る。曰く、『Smith は、保存せられ得る交換價値を有する物に對してのみ富の名を與へ、生産せらるゝと同時に消費せらるゝが如き生産物に對して富の名を與ふることを拒絶せり。然れども、醫師の産業、辯護士、裁判官の産業等は、是等の人々の勞働なくんば社會そのものゝ存續不可能なるほどに重要なる諸欲望を滿足せしむるものなるに、是等の勞働の所産は果して眞實のものにあらずとするや。そは、Smith の富と呼べる有形的なる他の生産物を、之と換えて獲得し得るほどに眞實のものたるなり。無形生産物の生産者が斯かる交換を反覆することによつて資産を成し得るほどに眞實のものたるなり。若しそれ下つて純然たる娯樂に就て云はむか、巧妙なる喜劇の演出が、Smith の説に於て生産物の名を帶ぶる一封度のボン〳〵又は一個の細工煙火と同樣に、眞實の快樂を與ふるものなることは否認し難き所なり。予は、畫家の才能を以て生産的なりとなしつゝ、音樂家の才能を以て生産的にあらずとすることの、合理的なるを發見すること能はず』（Ibid., p. 123-4.）。

又、持續性に就て見むか、『物質的生産物中にありても持續の程度には多大の相違あり。家屋、家具、銀器の如きは持續性頗る大に、野菜、果物の如きは頗る小なり。されど持續性の大小は、毫も其の生産物たるの性質を傷くるとなし。……完全に生産せられたる後に程なく消費せらるゝものより、更に下つて、生産の瞬間に於て消費せらるゝもの例へば演劇の如きに至つては、其の價値は毫も物質に固著せしめら

るゝことなくして、持續性に於て異なる所あるも、而も欲望・嗜好を滿足せしめ評價販賣せらるゝものたりとの本質に於ては毫も異る所なきなり。Smith 等は、是等のものは從て生産せらるれば從て消費せられ、何等の持續性を有せざるが故に集積せらるゝこと能はず、從て社會の資本を增大せしむること能はざるものなりとの理由を以て、之に對して生産物の名を與へざるも、…價値は、そが消費せられたることを理由として、生産せられざりしものなりと云ふことを得るや。後に何物も殘らざるの故を以て、生産せられ販賣せられ消費せらたるものをも生産物にあらずと云ふの理由なきこと、以て知るべし」と (Cours Complet d'Économie Politique Pratique, Ire Partie, Ch. V.)

然るに Charles Dunoyer に至つては、其の無形の富に關する意見は Say よりも更に一歩を進めて居る。彼は、Say が、無形生産物は何物にも定著せざる生産物であり、生産せらるゝと同時に消失する生産物であり、集積すること能はざる生産物であり、直接に國富に加ふる所なき生産物であり、之を增加することが時に不利をさへ伴ふ生産物であるとなせるに反して、そは物に定著し得るものであり、直接に國富に貢献するものであるとなして居る。

彼は云ふ。『無形の生産物を以て、生産せらるゝと同時に消失すとなすは正確でない。生産せらるゝと同時に消失するものは、行はれたる勞働そのものであつて、勞働の結果として生ずる效用は決して即時に消失するものでない。富は勞働の集積にあらずして效用の集積である。醫師・裁判官等の生産物は、他の一切の勞働者の生産物と同じく、其の働きの目的物たる人間に對して、有用永續的なる變化を及ぼし道德・教育・趣味を普及せしむるの點に於ては、生ずるに從つて消滅せずして、保存・增加・集積せられ得るものである。是等の人々の生産物は何物にも定著せずとは云ひ難い。そは、紡績職工の生産物が物に定著し體現すると同じく、人體に定著する。既に人體に定著する價値は集積せられ得ずとは云ひ難い。そは、吾人が身體に受ける所の有用なる變化を增加せしめることが出來る。そは又、一國の資本に何物をも加へずとは云ひ難い。そは眞實に國富を增進せしめる。知識の資本又は善良なる慣習の資本は、貨幣の資本よりも價値少なしとはしない。苟くも一國に文化ある限りは、德性・教育・趣味等は最も貴重なる富の列に加へられる。加

ふるに、そは物質的なる他の價値を獲得するに必要なる手段である。……醫師・敎師・藝術家・官吏等の如く、其の產業が直接に人間に向つて行はるゝ階級の勞働者が、其の勞働の結果として生む所の、人間の內部に發展せしめる能力に至つては、眞實の、永續的なる、讓渡し得べく交換し得る所の富たること、他の勞働者が無生物に定著せしめる所の生產物の然ると異なる所はない。否、是等の富は、物質中に定著せしめられる富よりも一層持續的である。蓋し、物質に定著せしめたる富は使用に際して必ず失はれなければならないに反し、思想・感情等は傳達によつて增加し使用によつて完成せられるからである」と。(Liberté du Travail, Livre V, §§ 3 et 4.)

斯くして彼は云ふ。生產者なる語の意義をば、其の活動が物に傾注せらるゝ產業のみに限つて、直接に人間に向つて働く產業を除外することも、又、後者は前者ほどに生產的ならずと云ふことも、又、其の生產物は保存・集積せられ國富の總量に附加すること少なしと云ふことも、總て正確でない。兩者の間に存する唯一の眞の相違は、一は或る種の效用を物の中に定著せしめ、他は他の種類の效用を人間の中に定著せしむるの點に在るのみ。而も定著せしめらるゝものは兩者何れも效用たることは同一である。之を生產する者は等しく生產者である。而して兩者何れも、それ〳〵特異の方法によつて、人類の力を增加せしめ人類をして力と活動の自由とを得しむるに貢獻するものである、と(loc cit.)。

斯く論じ來れるDunoyerは、最初は何物をも創造せずして總て天與の物資に依賴し居たりし人類の中で、先づ農業者の生產的なることが認められ、尋で工業者の生產的なることが認められ、更に商業者の生產的なることも認められると云ふが如く、總て物に對して働く所の產業の生產的なることは順次に認められ立證せられて來たが、直接に人間に對して働く所の產業は、其の有用なることは認められても、其の生產的なることは立派に立證せらるゝには至らなかつたとなし、其の立證の企ての成功せざりし所以をば、勞働と勞働の結果とを區別するに至らざりしの一事に歸せしめ、自らは「活動と其の結果とを區別することによつて、是等の人々の活動は、他の工業者の活動と同樣に、適當に行はれたる場合には其の後に最も眞實にして最も有用なる結果を遺すものなることを明白に立證し得たと信じて居る」のである(Ibid. p. 441.)。

三

Smithの學說が、佛蘭西に渡つてから益〻人的心理的な傾向を大ならしむるに至つた第二の點は、價値の概念の中に見出される。

Smithが「國富論」に於て價値に就て論ずる所は、專ら「或る物件の所有が齎らす所の他の貨物を購買するの力」と云ふ意味に於ける價値、即ち交換價値に就てゞあり（Wealth of Nations, Cannan's Edition, vol. I, p. 30.）、そは勞働に於て常に不變的なる秤量を見出すものであゝ（Ibid., p. 35.）、貨物の眞の價値の分量はそが購買又は支配する勞働の分量であるとして居る（Ibid, p. 32.）。而して此の貨物の價格は如何にして定まるかといふ點に關しては、Smithは、價格には一時的なる市場價格と永久的なる自然價格とあり、前者は需要供給の關係によつて時々高下するも而も常に後者を中心として之に歸著せむとするの傾向がある（Ibid., pp. 58-60.）、此の變動極まりなき市場價格の中心點歸向點たる自然價格は、貨物を生ぜしめ加工し市場に齎らすに用ひらるゝ土地勞働資本に對して地代・賃銀・利潤を自然的の率に從つて支拂ふに足りて過不足なき價格であり、そは、貨物の値する所と、即ち、之を市場に齎らす人に對して眞に費やさしむる所と、正に同一であるとなして居るのである（Ibid., p. 57.）。之だけに就て見れば、Smithの價値論には客觀的物質的な分子のみがあつて主觀的心理的な分子は存在して居らないが如くであるけれども、事實は必ずしもそうではない。Smithが「國富論」に於て、價値に使用價値（Value in use）と交換價値（Value in exchange）とある（Ibid., p. 30.）と云つて居る所の其の使用價値なるものは、實は、彼が「價値は時として或る物件の效用を云ひ表はす」（Ibid., p. 30.）と云つて居る如く、物の效用を指すに外ならない。又、彼は、グラスゴー大學に於ける「講義」に於ては、效用（use）をば貨物の市場價格決定の三原因の一なる需要を喚起するの基礎と認めて居る（Lectures on Justice, Police, Revenue and Arms, Edited by Ed. Cannan. 1896. p. 176.）、兎に角に效用を指摘して居るSmithの價値論には、心理的なる或る物が全然缺如して居るとは云はれないのである。唯、彼の指摘する此の效用の概念は、彼によつて其の後何等發展せしめられて居らないのみ。價値に關するSmithの意見は、幾分か人的な、心理的な、主觀的な閃めきを見せては居るものゝ、そは背面に葬り去られて、專ら物質的客觀的な相を示して居るのである。

然るに、大體に於て Smith の『國富論』を祖述して居ると認められ得る所の Say は、「物の價値或は交換價値とは、人が之と換えて取得し得る所の、價を附し得る他物の分量である」(Traité d'Économie Politique, Épitome, art. Valeur des choses.) となして、等しく專ら交換價値を取扱ひつゝあるも、而も其の間に於て著しく心理的、主觀的な、從て相對的な傾向を表はして居る。彼は先づ第一に、Smith が曖昧の儘に放拋したる價値と效用との區別を明かにして、後者を以て前者の第一の基礎なりとして居る。曰く、效用とは「物が何れの方法に於てなりとも人間に役立ち得る能力」であつて、如何に無用の物又は不便な物でも、苟も人間が之に價格を附するが如き用途に向けらるゝ限りは效用を有する。而して此の價格こそ、人が見て以て物が有すると判斷する所の效用の程度を表示する。故に、效用は需要の基礎たり、從て價値の基礎たり」と(Ibid., art. Utilité.)。Smith の講義を聽聞したともなき、又恐らくは其のグラスゴー大學の講義筆記なるものを見たことのなかるべき Say の此の言が、『國富論』中になくして、『講義』中にある Smith の右引用の所言の偶〻詳說となつて居るのは、奇しき一致といふべきか。何れにしても、價値の基礎として效用を認める所の Say は、效用は人間の欲望に基づくものであり、此の欲望は人間の道德的性質及び寰境によつて異なるものであるといふことを詳細に論じて (Cours Complet d'Économie Politique Pratique. Ire Partie, Ch. I.—III.)、價値の頗る相對的なものたることを示して居る。然し Say は、價値を以て、全然效用のみに比例して定まるものとは見ない。效用の中でも、自然の與へたものは經濟の範圍に入らずして、價値は人間によつて與へられたる效用に比例して定まるものであると做して居る (Cours, Ire Partie, Ch. III.)。換言すれば、人間が物に效用を與へる爲めに要する所の費用によつて定まるとして居る。蓋し、「物の價値が生產費以上に上れば、需要者は自ら之を作るを以て利ありとして需要することを停止すべく、又、價値が生產費以下に下るときは生產が行はれないからである。「生產費は價値の第二の基礎をなす」(Traité, Épitome, arts. Valeur, Frais de Production, Utilité. 參照)。

斯くして價値は、Say にあつては、「常に變動することを本質とする」も、而も其の分量は自ら生產費の程度に落ち著くものと觀せられて居るのであつて、其の價値論は、一半に於て、效用を基礎とし從て欲望を基礎として價値の成立を說くの點に於

て、Smithのそれよりも一層明白に心理的・主觀的・人的の色彩を加へて來て居る。然し、價値の基礎たる效用を以て、人により處によつて相違ある相對的のものと做しつゝも、之を物に附著せる能力又は性質となすの點に於て、未だ全く物質主義を脱するに至つて居ない。又、生産費を基礎として價値の分量の決定を說明する點に於てSmithの影響を免がれて居らないのである。

Bastiatに至つては、價値を人的現象と見る所の心理的傾向は最も顯著に現はれて居る。彼は、價値を說明するに當つて、先づ苦痛たる欲望と快樂たる滿足との研究から、即ち屬人的にして讓渡し難き且つ相互比較し得べからざる感覺の研究から出發する(Harmonies Économiques, Ch. III.)。而して彼は次の如くに云ふ。欲望を滿足せしむる所のもの即ち效用の中には、自然が無償で與へる效用と、人間が努力によつて自然の無償で與へるものを利用して有償的に與へる所の效用とが存する」(Ibid., Ve Ed. par Paillottet, pp.77-92.)、社會的なる經濟生活は「欲望――努力――滿足」なる形式を取り、其の中項をなす所の努力は讓渡せられ得るが故に人は互に勤勞を致すことになる、而して經濟學は勤勞の讓渡交換を主題とする。而も他方から見れば經濟學は價値の學問である。故に價値は此の勤勞を基礎とするにあらざれば說明せられ難い。然しそれは單なる勤勞のみでは說明されない。價値は元來比較評價秤量を意味するものであり、從て、性質を同じうし且つ互に比較し得る二つ又は二つ以上の物の存在することを必要とする。然らば勤勞は何物の中に於て、此の比較せらるべき他の物を發見し得るか。社會生活に於てのみ發見し得る所の他の勤勞の中に於て、即ち、一人の努力・勤勞に對する他人の努力・勤勞の中に於て之を發見することが出來る。故に「價値は二つの勤勞の割合である」(Ibid., pp. 143-145.)。盲人が中風症の不隨者に向つて「予は汝を負うて歩まむ、汝は見て予に道を敎へよ」と云ふとき、そこに價値が發見せられ定義せられる(Ibid., p. 144.)。吾人は總て何れかの點に於て云はゞ盲人たり或は不隨者たるものである。而も吾人は、互に助くるとき不幸の負擔が爲めに輕減せらるゝことを知る。故に交換を行ふ。吾人は互に衣食住その他を供給し合ふ。斯くして相互的勤勞が生ずる。而して吾人は、是等の勤勞を比較し、討議し、評價する。茲に價値が生ずる」(Ibid., p. 145.)。

價値を斯く解する Bastiat にとつては、價値は全く物質から抽象せられたものに

なる。價値を有するものは物質ではなくして、物質を介して與へらるゝ勤勞である。人が物の價値と稱するものは、實は物を介して授受せらるゝ眞實又は架空の勤勞の價値に外ならない。絶大の效用を有する空氣が價値を有しないのは、それが何等の努力、何等の勤勞をも生ぜしめないからである。效用を有するのは物である、價値を有するのは勤勞である。「水一荷に對して金五スウを支拂ふことを約束した場合には、此の水が金五スウの價値を有すると人は云ふけれども、それは、恰かも夕刻になれば太陽が西に沈む (Le soleil se couche.) と云ふ場合と同じく、一個の換喩法に過ぎない」(Ibid., p. 150.)。斯くして Bastiat は、效用を價値の第一の基礎なりとする Say の說を評して、彼を以て價値論上に於ける物質性の羈絆を脫したるの權輿なりとなしたる後「若し Say の意味する所にして人間の勤勞に關しての效用に在りとせば、そは自明の理である。」蓋し、勤勞 (service) なる語は、勤勞を致す (servir) の意味を有するラテン語 Uti の直譯に外ならずして、當然效用 (utilité) の意を有するからである。然し Say は、價値の原則をば、物を介して與へらるゝ人間の勤勞の中に於てのみならず、自然が物に與へたる有用なる性質の中にも見出して居る。從て、價値は、人間が作出するのみならず自然も作出する、といふ結論に導かれることになる」と云つて居る。(Ibid., pp. 180-182.)

價値の本質を人的なる勤勞の中に求めて、Smith とは頗る懸け離れたる Bastiat は、價値の分量が如何に決定せられ量定せらるゝやに關しては未だ全く Smith の影響を脫するに至つて居ない。彼は云ふ。「一の勤勞の相對的重要の程度、即ち、價値は、種々の事情によつて增減する。そは、有用の程度の大小に從つて增減する。又、之を與へ得る人の多少によつて增減する。又、勞働苦痛熟練・時間・修練の必要等の大小に從つて增減する。又、之に對する吾人の判斷の如何によつて增減する。又、そが人をして勞を節せしむる程度の大小に從つて增減する、と (Ibid., p. 146.)」彼が、屢々引用せらるゝダイヤモンドの例を引いて述べて居る所は、此の事を最もよく說明して居る。「海岸を散步してダイヤモンドを拾得した者は大なる價値を手にしたことになる。然しそれは、彼が人類に向つて大なる效用を擴布することになるが爲めではない。又、彼が大なる勞働を費したるが爲めでもない。一に、之を他人に讓渡する場合に於て、讓受人が多大の勤勞を致されるものと思惟するによる。

富者の之を求むること大なるほど此の勤勞は益々大なりと思惟せらるゝによる。價値は、完了せられたる勞働中に存せず、之を受くる者にとりて節せしめらるゝ勞働中に存す」と（Ibid., pp. 152-3.）。吾人は、此の引用文中の最後の一句を讀むに當つて、Smithの「貨物の價値は其の所有者をして購買又は支配するを得しむる勞働量に等し」（Wealth of Nations, vol. I, p. 32.）といふ一句、並に、What everything is really worth to the man who has acquired it, and who wants to dispose of it or exchange it for something else, is the toil and trouble which it can save to himself, and which it can impose upon other people. (ditto.) の一節を想起して、Bastiat に及ぼせる Smith の影響を思はざるを得ないのである。

そは兎に角として、價値に增減を來す所の右述の諸事情は總て可變的なるものなることを思ふときは、價値の確定的尺度は如何にして見出すことが出來るか。Bastiat の云ふ所は次の如くである。一般に行はれて居る所は、金銀を以て尺度とするに在る。勿論それには多大の價値變動あるを免がれないが、然し、若し此の變動にして、交換せらるゝ二物に對して同樣に影響して交換の誠實を傷くることなしとすれば、斯かる尺度それ自身に於ける價値變動は毫も意に介する事を須ひない。二つの勤勞の現實の割合如何を求むる場合には之を以て滿足せられ得る。然し、一と度、努力と滿足との割合を求むるに當り、又は、二つの國民或は二つの時の間に於ける富又は幸福を比較するに當つては、斯かる尺度は、勤勞又は勞働そのものゝ中に見出すの外はない。勞働それ自身は可變的なものであるが、而も何れの時・處に於ても、それ自ら種類を同じうする勞働がある。最も單純・低級・幼稚なる筋肉勞働、自然の協力から全く遠ざかつた勞働、何人も爲し得る勞働、人生の出發點に於て存する勞働、即ち、單なる日傭稼ぎの勞働者の勞働がそれである。二國間の幸福を比較せむとする場合には、此の單なる日傭稼ぎの勞働者が交換によつて獲得する福祉如何を求むべきである、と（Ibid., pp. 193-196.）。Bastiat を讀んで茲に至るとき、吾人は Smith の所說の一節、

Equal quantity of labour, at all times and places, may be said to be of equal value to the labourer. In his ordinary state of health, strength and spirit; in the ordinary degree of his skill and dexterity, he must always lay down the same portion of his ease, his liberty, and his happiness. The price which he pays must always be the same, whatever may be the quantity of goods which he

receives in return for it. Of these, indeed, it may sometimes purchase a greater and sometimes a smaller quantity; but it is their value which varies, not that of the labour which purchases them. At all times and places that is dear which it is difficult to come at, or which it costs much labour to acquire; and that cheap which is to be had easily, or with very little labour. Labour alone, therefore, never varying in its own value, is alone the ultimate and real standard by which the value of all commoditics can at all times and places be estimated and compared. It is their real price; money is their nominal price only. (Smith, Wealth of Nations, Cannan's Edition, vol. I, p. 35.)

を想起して異工同曲の感なきを得ないのである。

四

Smith以後の佛蘭西の經濟學說に於て、人的傾向の高められた更に一個の方面は、生產要素中に於ける人的要素、就中企業家の職分が重視せらるゝに至つた點に見出すことが出來る。

Smithは、Physiocratesが土地の生產力を過重視したるに反して、勞働の生產力を高調した。『國富論』の劈頭第一頁の第一行は、「各國の年々の勞働は、各國に對して其の年々消費する生活必要品並に便利品を供給する原始的の基本である……」といふ文句を以て始められて居るのであつて、土地を富の源泉なりとするの思想に同意せざるの意思が先づ明かにせられて居る。思ふに之は、彼が生產上に於ける自然の職分に關して懷いて居つた見解と相關聯して居るものであらう。彼は云ふ。農業に於ては自然が人間と共に働く。人間は自己の消費と同額の、又は人間を雇傭する資本と同額の、價値を生產する。而して自然は地代を生む。然るに工業に於ては、之に反して、自然は何事をも爲さない。人間が總てを行ふ、と（Wealth of Nations, vol. I, pp. 343－4. 參照）。斯くて、勞働を重視するSmithは、一國の富の增加の原因を以て勞働の品質、組織、生產的勞働者の割合如何に在りとした。而して、多くの人々（例へばGarnier; Say; Hector Denis; Charles Rist.）をして、Smithを目して、勞働を價値の唯一の淵源なりとなしたるものなるが如くに云爲するに至らしめた程に勞働を重視して居るのである。

然しながら、彼が同時に資本の職分を重視して居ることは右に劣らざるものがある。Smithは云ふ、資本が雇傭し得る勞働の分量は、そが勞働者に材料、道具及び食料

品を與へ得る分量による、と(Ibid., pp.278-9.)。又、資本は農業に投ぜられたる場合に最も多く生産的勞働を雇傭し、工業に投ぜられたる場合之に次ぎ、外國貿易に投ぜられたる場合最も劣れるが故に、一國の繁榮は、資本が農業・工業・外國貿易の三者に投ぜらるゝ割合如何による、とも云つて居る(Ibid., pp. 344-7.)。更に又、一國の一般産業は常に之を雇傭する資本量に比例するとも云つて居る(Ibid., p. 422.) Smith は勞働を頗る重視しつゝも、同時に資本に對して、此の勞働を支配するといふ等しく重要なる職分を認めて居る。而して、未だ企業家としての職分に對して、資本家としての職分より區別せられたる獨立的存在を認むるに至つて居らないのである。

然るに Say に於ては、生産要素中に於ける人的な要素を重視するの傾向が更に著しく現はれて居る。Say は、先づ生産要素(彼は之を生産基本 Fonds productifs と呼んで居る)をば、産業基本なる人的要素と産業要具基本なる物的要素とに二分して、兩者を對等の地位に置き、産業なくしては要具は無爲の狀態に在るべく、要具なくしては産業亦何事をも爲し得ざるべしとして居り、次に産業基本を分つて學者・企業家・勞働者の三となし、産業要具基本をば財産たらざる要具と、財産たる要具とに分ち、後者を更に財産となれる自然的要具と過去の産業の果實たる資本とに分つて居る(Cours Complet, Ire Pratie, Ch. VIII.)。既に此の分類を見ただけでも、Say が如何に産業基本なる人的要素を重視したるかゞ窺はれる。然るに此の點は、彼が更に進んで、企業を以て生産の組織なりとなし、其の中心に、否、最高の位置に企業家を据えて他の諸要素を從屬的の地位に立たしめ、茲に生産要素の上に一種の階級制度を樹立して居るの一事によつて、一層明瞭に感知することが出來る。

彼は云ふ。物をして欲望滿足に適せしめむが爲めには、先づ案を立てゝ之を實行することを要する。即ち、或る物を或る方法で作らば此の目的に適ふべく、完成の上は世人が之に價格を附するに至るべく、而も其の價格は以て費用を償ふに足るの程度に達すべしと判斷し、之に要する材料を集めて之を活躍せしめることを要する。企業(Entreprise)は斯くして生ずる。然るに企業を行ふ所の企業家(Entrepreneur d' industrie)は、先づ技術上の手續を知ることを必要とするが、此の點に就ては知識を基礎とすべきものである。知識は産業能力の根本的部分であり、科學の盛衰は一國の産業の盛衰を分つ。更に企業家は、知識を有する外に、人間の欲望を知つて

之に知識を應用することを必要するが、之が爲めには、人間の肉體的欲望のみならず道德的構成を知ることを要し、從て知的結合を必要とする。彼の職分は結合に在る。産業は學者の研究、企業家の應用、勞働者の執行の三者より成るも、此の中で企業家の職分は最も重要である。蓋し、他の二つの職分は、必要ではあるが其の力を發揮せしめるものは企業家に外ならぬ。研究と執行とは他人をして爲さしめることが出來るが、判斷と結合とは企業家に俟つの外はない、而して企業家にして之を誤らば、自ら損失を蒙るのみならず國を傷ふことになるからである、と。（Cours Complet, Ire Partie, Ch. VIII.）

Say は、生産要具を提げて生産に參加する者は總て之を生産者と呼んで居るが、此の中、産業を以て參加する者を直接の生産者、他の土地資本を貸與することによつて參加する者を間接の生産者と呼んで居る。而して此の中で、直接の生産者たる企業家が分配の中心人物とせられて居るものなることは、彼が財産權に關して次の如く云つて居ることによつて了解せられる。『所有權が生産を助長するあらむが爲めには、生産基本の所有權が其の果實の上にも及ぶことを必要とする。然らば此の果實は何人に與へらるべきや。其の創造者に對して、即ち、價値を增加作出した者に對して與へらるべきである。然るに、斯かる生産者は多數あり、其の中の何人に與へらるべきか。曰く、企業家に。何となれば、他の生産者は彼に對して既に其の生産的勤勞を賣つたものであるからである』（Cours, Edition à Bruxelles, p. 239, Ire colonne.）。さきには Turgot（Réflexion, Ashley's Transl. 1770. § 87.）& Garnier（Abrégé. 1796. p. 37.）によつて片鱗が示され、後には Walker（Political Economy, 1883; Quarterly Journal of Economics, April, 1887.）や Mangoldt（Die Lehre vom Unternehmergewinn, 1855.）によつて明瞭詳細に說明展開せらるゝに至つた所の企業家の職分乃至は企業家的生産組織は、Say によつて始めて先づ組織的に說明せられたのである。

生産要素中に於ける人的要素たる産業を重視し、就中企業家の職分を重視することによつて、正統派の經濟學は佛蘭西に渡つてから益々人的傾向を加へて來たと見ることが出來やう。

五

Smith の經濟學說には、程度の差こそあれ、種々の點に於て可成に著しき人的心理

的の傾向の窺ひ得べきものあることは、單に右に取扱ひ來れる二三の點だけに就ても知ることが出來るのであるが、斯くの如きは必ずしも理由なきことではない。

第一に、Smith は單なる經濟學者ではなくして、廣い意味に於ける道德哲學者であつた。彼が、千七百五十一年から六十三年にかけての十三年間に亘つてグラスゴー大學に於て試みた講義に於ては、其の第一部は自然神學であり、其の第二部は倫理學であり、而して其の第三部には經濟學が宛てられて居つたのであつて、後年「國富論」となつて現はれた所の彼の經濟學は實に彼の道德哲學の一部分を成すものに外ならなかつたのである。彼の經濟學説に人的心理的な分子が潛入して居ることは怪しむに足りない。

更に、Smith は、云ふまでもなく環境の影響を受けて居ることが少なくない。千七百五十一年から六十三年に至る彼のグラスゴー大學時代の當時並に前後は、特に人的な科學に關する著作に於て豐富であつた。千七百四十八年には Montesquieu の De l'Esprit des Lois. と Hume の Moral and Political Essays. とが現はれ、千七百五十五年には Hutcheson の System of Moral Philosophy が公にせられ、翌千七百五十六年には Quesnay の百科全書に於ける論文 Fermiers 並に Grains が現はれ、二年後には Tableau Economique の公刊を見た。斯かる環境の中に在り、特に Hutcheson の後繼者として道德哲學の講座を擔任せし Smith に於て、人的な要素が益々培はれて其の經濟學説の基礎となつたことは異とするに足りない。『國富論』と同年に公にせられた Condillac の Le Commerce et le Gouvernement considérés l'un à l'autre. に於ても、幸福を求め苦痛を避けむとする人間の傾向が此の著者の社會觀の基礎を成して居るのである。(Hector Denis, Histoire des Systèmes Economiques et socialistes, Paris. 1904. vol. I, pp. 210-220, 241. 參照)

斯くして、Physiocrates が、經濟論をば、純思辯的であり、對象を支配する法則を知らむとする以外に何等の目的を有せざる自然科學たらしめたるに反して、Smith は、經濟學をば、對象を改善し最高の完成に達せしめむとする他の道德科學と結び付けて居り (Garnier, Préface de "Richesse des Nations," p. XIX.)、前者が抽象論を極度まで推し進めたるに反して、後者は現實の人間の本性を出發點として研究を進めたのである。現實的實相的研究を行ふ Smith に於て、人的心理的な傾向の横はれるを見るのは、毫も怪しむに足りないのである。

然らば、Smith の所説の中に窺はれる此の同じ傾向が、爾後の佛蘭西の學者に受け入れられて益々其の色彩の顯著を加へて行くやうになつたのは、如何に説明せられ得るか。そは何等かの理由があつての事であるか、それとも偶然の出來事に過ぎないのか。等しく Smith から出た流れであつても、英國を流れた一分流は、富を物質的に解し、價値を生産費で説明する等のことによつて、著しく物的・客觀的の傾向を示して居るに反して、佛蘭西を流れた一分流が著しく心理的・人的・主觀的の傾向を示して居るのは何故であらうか。

思ふに、Garnier より Bastiat に至るまでの佛蘭西の諸學者は、大體に於て Smith の正統を繼承したる正統學派に屬するものと見られ得る、といふ一事以外には、相互の間には殆んど何等特別の師弟の關係はない。又、Germain Garnier の著作 Abrégé. の出現から Bastiat の Harmonies Économiques. の公刊に至る半世紀以上に亘る期間に於て、是等の諸著者を包み居たりし環境は必ずしも同一ではなく、各自特有の經歴と事情との下に在つてそれ〴〵思索を行つたのである。Garnier は Physiocrates を辯護せむとして無形の富を暗示するに至つた。Say に於ては、商家に生れて商人たるべく育てられ、「と度は自ら工業上の企業家たりし經驗からして其の企業家論が生れた。Bastiat の價値論は經濟上の利害の調和を立證せむとする理論體系の一部であり、Dunoyer の無形財論は數年間の牧民官としての經歴よりする經世的見地に出てゝ居る。思想が社會的の世襲財産たる一事を別にしては、是等の諸學者を同一方向に導いた直接の理由は見出し難いと思はれる。然しながら、此の點に就ては佛蘭西人なるもの丶一性質、詳しく云へば、佛蘭西人は、全體として、事理の透徹と明瞭とを期するの傾向あるの一事が餘程與つて力があるのではあるまいか。

Rivarol は、千七百八十三年に獨逸ベルリンの學士會が提出した所の「佛蘭西語が世界的となりし理由如何」といふ懸賞課題に答へた L'universalité de la langue française. に於て、佛蘭西語の特徴をば、其の句(Phrase)の構成に於ける順序が常に必然的に直接であり從て明瞭であるの點に在りとなし、此の明瞭そのものが佛蘭西語の生命であり、明瞭ならざるものは佛蘭西語ではない、と云つて居るが、(Bouglé et al., Qu'est ce que l'Esprit français, 1920, pp. 4-5)佛蘭西語の此の特徴は軈て佛蘭西人の特徴である。佛蘭西人は明瞭を貴ぶ所の言語に慣らされて居るの結果として、思索に

於ても事理の透徹を貴び、前後脈絡あり首尾一貫せることを貴ぶ。從て、或る現象を充分に說明せむとする場合には、其の原因に遡り、其の結果に說き下る。上來吾人が考察したる佛蘭西諸學者の所說を見ても、その各々が、それ以前に存せし學說中に於ける矛盾や不徹底を除き、事理を一層深く且つ詳細に闡明するの方向を取つて居ることを發見し得る。此の一事は、佛蘭西に於ける經濟學の一傾向を說明するに叙上の一國民性を以てすることの、妥當なりや否やは兎に角とするも、少なくともその必ずしも不可能ならざるを示して居るのではあるまいか。尤も、明瞭を貴び首尾一貫を重んずるの精神は、往々にして、人をして、物を離れての推理即ち抽象的推論を逞しうして遂に眞實を遠ざかるの危險に陷らしむることあるべきは否み難い。現に吾人は、斯かる思辯の犧牲となりし者の例を Physiocrates に於て發見する。吾人は、經濟學の研究法に關して、事實の觀察による歸納法の重要を力說したる Say の所言（Traité d'Économie Politique, Edition Guillaumin, p. 3-5.）を以て、佛蘭西人に對しては特に意義深きものたるを思ふものである。

アダム・スミスの商業に對する思想

向井鹿松

アダム、スミスの商業に對する思想は此を次の如く分ちて考察するを便とする。

一、商業の生產力に關する學說
二、國內商業の組織及び政策に關する思想
三、商業及び商人に對するスミスの思想及び感情
四、外國貿易に關する學說

此內最後の外國貿易に關する學說は所謂自由貿易の學說として知られてゐる所のもので、其研究の公けにせられたもの內外共に少しとしない。故に余は專ら最初の三個の點に就いてスミスの思想を探究する。

第一の項目の下に於て余は先づアダム、スミスが其生產的、不生產的勞働の區別をなすに、其勞働の對象たる財を何故にキャナンの用ひてるやうな Material Object と云ふ字を用ひないで常に例外なく Vendible Commodity と云ふ文字を用ひたかと云ふ理由を說明する。次いで彼が一般產業の生產力比較の標準としたる點と、各種卸商業の生產力の比較の標準として採りたる點に相違の存することを指摘し、而して此第二の